

# 学級内の友人関係に対する自律的動機づけに関する事例研究 ～学びのドーナツ論を援用した道徳授業プログラムを通して～

水流卓哉\*・赤坂真二\*\*

(令和5年8月31日受付；令和5年10月31日受理)

## 要 旨

本研究は、学びのドーナツ論に基づく対人関係上の意識拡大を図り、人間関係形成能力に寄与することを目的とした「特別の教科 道徳プログラム」を開発及び実施し、良好な人間関係の形成に向けた子どもたちの友人関係に対する自律的な動機づけにどのような影響をもたらすか明らかにすることを目的とした。具体的には、学びのドーナツ論に基づいて、自分を取り巻く対人関係構造を、個人から少数者集団、少数者集団から、多数者集団へと学びの広がり意識できるようなプログラムを開発して授業を行った。その結果、友人関係動機づけ尺度における同一化調整および内発的動機づけにおいて、有意な上昇が見られた。プログラム実施後の振り返りからは、向社会的行動や自己開示への動機づけを高め、友人との良好な人間関係の形成・維持に対して積極的な姿が明らかとなり、本研究において開発した道徳授業プログラムが、児童の友人関係に対する自律的動機づけの向上に寄与した可能性が示された。

## KEY WORDS

道徳教育 道徳授業プログラム 自律的な動機づけ 良好な人間関係

## 1 問題の所在と目的

「令和3年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果概要（文部科学省，2022）」では、児童生徒のいじめ認知件数や不登校の児童生徒数に関して共に過去最多数を更新している背景から、学校や学級への不適応が課題であると考えられる<sup>(1)</sup>。これに対して「令和2年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果概要（文部科学省，2021）」では、「新型コロナウイルス感染症によって学校や家庭における生活や環境が大きく変化し、子供たちの行動等にも大きな影響を与えていることがうかがえる」と指摘している<sup>(2)</sup>。このような学校や学級における不適応の問題に対して、生徒指導提要(2022)では、「集団生活の中でよりよい人間関係を築き、それぞれが個性や自己の能力を生かし、互いの人格を尊重し合って生きることの大切さ」を意識した指導の重要性を示している<sup>(3)</sup>。これらのことから、子どもたちの人間関係や集団形成に関わる問題は、教育現場において大きな課題の1つとなっており、学級内における人間関係や集団形成を促進し、良好な人間関係を築くことの必要性が窺える。

良好な人間関係構築を教科指導において促進していくために、「小学校学習指導要領 特別活動編（文部科学省，2008）」の目標では、新たに「人間関係形成能力」が加えられ<sup>(4)</sup>、改訂後の「小学校学習指導要領 特別活動編（文部科学省，2017）」の資質・能力には、「多様な他者との協働」、「人間関係」、「自己の生き方」、「自己実現」など、道徳教育がねらいとする内容と共通している面が多く含まれており、道徳教育において果たすべき役割は極めて大きいとある<sup>(5)</sup>。同様に、「小学校学習指導要領 特別の教科 道徳編（文部科学省，2017）」の、「第6節 道徳教育推進上の配慮事項」には「多様な他者の意見を尊重しようとする態度、自己の役割や責任を果たして生活しようとする態度、よりよい人間関係を形成しようとする態度、みんなのために進んで働こうとする態度、自分たちできまりや約束をつくって守ろうとする態度、目標をもって諸問題を解決しようとする態度、自己のよさや可能性を大切に集団活動を行おうとする態度などは、集団活動を通して身に付けたい道徳性である」と指摘されている<sup>(6)</sup>。これらの主張は、重要な課題とされ続けている人間関係形成に関わる問題は、特別活動と道徳教育との関連を考慮しながら育んでいく必要性を示唆したものであると考えられる。

相対的に数は少ないながらも、良好な人間関係形成の育成を目指し、特別活動と道徳教育を関連づけた先行研究も存在する。例えば、伊佐(2005)は、道徳の授業とソーシャルスキル（以下、SSTとする）教育を関連させたプログラムを実施したことで「互いの考えを尊重し合い、認め合える人間関係」と定義づけた好ましい人間関係を結ぶ力に効

\*豊橋市立二川小学校 \*\*学校教育学系

果的であったと報告している<sup>(7)</sup>。また、丸山(2008)は、いじめ学習防止プログラムの自学級化プログラムを作成し、教科、道徳、SSTなどを体験的に学べるようにしたことが人間関係構築力につながったと報告しており<sup>(8)</sup>、佐藤(2009)は、ロールプレイングを取り入れた道徳の授業と特別活動を関連させることによって、望ましい人間関係を構築する力の育成に寄与したことを明らかにしている<sup>(9)</sup>。これらのことから、道徳の授業や特別活動におけるSSTなどを軸とした学習活動は、児童生徒が主体的に良好な人間関係を形成していこうとする意識の向上に寄与することになると推察できる。

このように、道徳と特別活動におけるSSTを中核としたプログラムに関する研究知見が蓄積されていく一方で、岡田(2013)は、SSTに関して、トレーニングであるため関係形成に対して外発的な動機づけになりやすい点と、友人とかかわろうという意思がない場合には効果が期待できない点を指摘し「どのような動機づけをもって友人とかかわろうとしているかにも注目すべきである」と主張している<sup>(10)</sup>。また、岡田(2013)は、Ryan&Deci(2000)による自己決定理論の枠組みから友人関係を捉え、友人関係に対する自律的な動機づけを「自分自身の選択や意思によって目的的に友人との関係を形成、維持しようとする動機づけ」と定義し<sup>(11)</sup>、加えて「友人関係の形成や維持に対して自律的動機づけをもつものは、友人に対して積極的に働きかけることで親密な関係を築き、適応や精神的健康を維持していることが考えられる」と主張している<sup>(12)</sup>。これらのことから、友人関係への動機づけを高めていくことは、児童生徒の良好な人間関係構築の促進に期待でき、その中でも特に自律的な動機づけを高めていくことが、児童生徒の良好な人間関係の形成・維持への主体性を引き出すことになると考えられる。

児童生徒の共感的なかかわりの必要性や、他者と主体性にかかわることに対する重要性を説く研究も存在する。例えば、佐伯(1995)は、A・ワロン(浜田訳, 1983)による自我発達論の考え方を基盤とした学びのドーナツ論を提唱している<sup>(13)(14)</sup>。学びのドーナツ論とは、図1のように、I(私)がドーナツの中心にあり、その周囲(いわばドーナツ部分)に位置するのがYOU(二人称的存在)、更にYOUの外側にいるのがTHEY(第三者的存在)と示している。また、IとYOUの接している面を第一接面と呼び、YOUとTHEYが接している面を第二接面と呼ぶ。この第一接面とは、Iである存在がYOU的存在と出会う場面、YOUという存在に気付く場面段階のことを指している。そして、YOU的他者は、更に外の世界(THEYの世界)へ目を向けさせる役割を果たしており、IにとってYOUとの出会いが学びの視野を外へと拡大していくことができると考えられている。つまり、「I」「YOU」「THEY」の関係を教育実践に当てはめれば、多くの場合、「I」は子どもとして想定される。そして、その子ども(I)が、外界にある何ごとか(THEY)について学習していく際に、その子にかかわってくれる教師や友人(YOU)などの共感的なかかわりの必要性を主張しているのである。

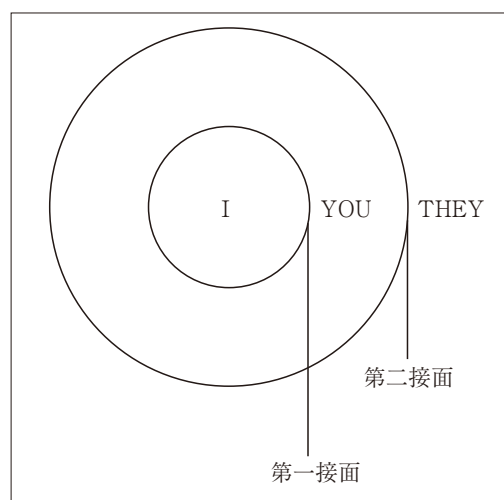


図1 学びのドーナツ論(佐伯, 1995をもとに)

「学びのドーナツ論」に依拠した実践報告や、実践の意義を証明している報告もいくつか存在する。例えば、吉田(1998)は、「学びのドーナツ」と関連する「文化的実践」の概念を用いて、自身の行った公民的分野の実践がいかに「文化的実践」になり得ていたかを論じている<sup>(15)</sup>。また、吉岡(2018)は、小学校の音楽科におけるタップダンスを教材とした授業実践において「学びのドーナツ論」をもとに考察を行い、実践で活用した教材は「YOU的道具」として子どもたちと「THEY世界=現実の社会・文化的実践の場」とを結ぶ可能性を十分に含んでいると報告している<sup>(16)</sup>。これらのことから、「学びのドーナツ論」に依拠した実践は、「YOU」とのかかわりや「THEY」、「文化的実践」への参加を通して、子どもの行動に向かう主体性を引き出すため実践像を志向する教師にとって一定の成果を上げるものであると考えられる。

以上、先行研究を概観してきたが、伊佐(2005)や佐藤(2009)による先行研究は、道徳が教科化される以前の研究で、検定教科書の教材を活用していない事例であることに加えて<sup>(17)(18)</sup>、道徳の授業が子どもたちの人間関係構築への自律的な動機づけにどのような影響を及ぼすかといった基盤となる部分を明らかにした研究は管見の限り見られない。また、学びのドーナツ論を援用した研究は、教科場面を対象とした学習指導に着目したものがほとんどを占めており、児童生徒の人間関係育成に援用した研究は見られないため、実証していく必要がある。そこで、本研究では、学びのドーナツ論に基づく対人関係上の意識拡大を図り、人間関係形成能力に寄与することを目的とした「特別の教科 道徳プログラム」(以下、プログラムとする)を開発及び実施する。具体的には、自分を取り巻く対人関係構造を、個人(I)から少数者集団(YOU)、少数者集団(YOU)から、多数者集団(THEY)へと学びの広がりを

意識できるような道徳授業プログラムを開発し、良好な人間関係形成に向けて、子どもたちの友人関係に対する自律的な動機づけにどのような影響をもたらすか明らかにすることを目的とした。

## 2 方法

### 2. 1 調査期間

20XX年10月3日～20XX年11月25日

表1 良好な人間関係の構築を促進する道徳授業プログラム

プログラム	時期／対象	小学5年D組（男子15名・女子13名）
	10月4日	質問紙調査（友人関係に対する動機づけ尺度）
ステップ1	10月11日	○自分や友達、友情関係について深める授業 ・教材名：「ミレーとルソー」・内容項目：B-(10)「友情、信頼」
ステップ2	10月18日	○謙虚な心を持ち、自分と異なる意見や立場を尊重することについて深める授業 ・教材名：「ブランコ乗りとピエロ」・内容項目：B-(11)「相互理解、寛容」
ステップ3	10月25日	○よりよい学級集団としてのあり方について考えられるようにする授業 ・教材名：「祭り日」・内容項目：C-(16)「よりよい学校生活・集団生活の充実」
	10月26日	質問紙調査（自由記述）
	11月25日	質問紙調査（友人関係に対する動機づけ尺度）

### 2. 2 対象学級

A県B市立C小学校5年D組29名（男子15名・女子14名）を対象学級とした。なお、本プログラムで行った授業全てに参加した28名を分析対象者とした。

### 2. 3 調査の手続き

第一筆者が、研究協力校の5年D組で週に1時間、全3時間、道徳の授業を行うアクションリサーチを方法として用いた。また、倫理的配慮として、研究対象者の学校長および対象学級の担任に対し、事前に研究の目的の説明に加え、研究実施の承諾を得た。さらに、研究で得た情報は、研究目的以外で使用しないこと、データ処理後は、一定期間管理後、適切に破棄することを文書と口頭で説明した。

### 2. 4 単元計画(良好な人間関係の構築を促進する道徳授業プログラムの構成について)

本研究では、先に述べたように、佐伯(1995)による学びのドーナツ論の考え方を援用して、自分を取り巻く対人関係構造を、個人から少数者集団、少数者集団から、多数者集団へと学びの広がりを意識できるような道徳授業プログラムを開発した<sup>(19)</sup>。表1のように、全3時間で構成されたプログラムのステップ1では、教材「ミレーとルソー」を用いて、内容項目「友情、信頼」の視点から、よりよい友人や人間関係づくりについて考えを深める授業を行う<sup>(20)</sup>。続くステップ2では、教材「ブランコ乗りとピエロ」を用いて、内容項目「相互理解・寛容」の視点から自分とは意見が合わない人とどのように関わっていくかについて考える展開を講じる<sup>(21)</sup>。そして、ステップ3では、教材「祭り日」を用いて、内容項目「よりよい学校生活・集団生活の充実」の視点から、よりよい学級集団としてのあり方について考えられるようにした<sup>(22)</sup>。なお、図3に授業の概要を示す。

教材選定や学習展開については、開発したプログラムの汎用性を担保するために、加藤(2017)や、東京学芸大学総合的道徳教育プログラム推進本部(2014)による「効果的だと思われた資料(教材)の頻度一覧」を参考にした<sup>(23)(24)</sup>。なお、指導案の作成に当たり、第一筆者が原案を作成し、教職10年以上の経験をもつ現職院生3名に検討を要請した。その後は、対象学級の担任と、研究協力校の道徳教育推進教師との協議をもとに修正を行い、同意が得られたものを対象学級にて実施した。

### 2. 5 調査・分析方法

#### 2. 5. 1 【分析1】友人関係に対する動機づけ尺度

本研究は、岡田(2013)が作成し、妥当性が認められている「友人関係に対する動機づけ尺度」を使用した<sup>(25)</sup>。本尺

度は、友人関係の形成や維持に関する動機づけを「外的調整」、「取り入的調整」、「同一化的調整」、「内発的動機づけ」の各4因子、計16項目から捉えようとするものであり、児童の人間関係の形成や維持に向けた動機づけを測定する際に適したものであると考えられる。しかし、本尺度は、大学生を対象に作成されたものであるため、文言については、筆者以外にも現職院生3名と協議し、対象学級の担任とも検討を行い、一部改良して実施した。その後は、尺度の改定に伴って信頼性が損なわれていないかどうかを確認するために、9月実施した事前テストで得られたデータを活用してCronbachの $\alpha$ 係数を算出した。その結果、下位項目の「同一化調整」( $\alpha = .91$ )、「内発的動機づけ」( $\alpha = .87$ )において、十分な内的一貫性が得られたため、本研究においても使用できると判断した。

本研究では、この尺度に関するアンケートを、プログラム実施前後に実施し、“とてもそう思う”“ややそう思う”“どちらともいえない”“あまり思わない”“まったくそう思わない”の5件法で回答を求めた。また、その際には、特定の友人だけでなく、全般的な友人を想定できるように「なぜ友人と親しくしたり、一緒に時間を過ごしたりしていますか」という教示のもと回答を求めた。また、回答を求める際には、アンケート項目をランダム化して配置した後、実施した。なお、分析には、中野・田中(2012)による「js-STAR」を使用し、一要因参加者内分散分析を行った<sup>(26)</sup>。

### 2. 5. 2 【分析2】OPPシートへの記述分析（振り返り記述）

「小学校学習指導要領 特別の教科 道徳編(文部科学省, 2017)」では、「理解した道徳的価値から自分の生活を振り返り、自らの成長を実感したり、これからの課題や目標を見つけたりすることが望まれる」と指摘しており、加えて、これまで道徳の時間は、一般的に1つの主題を1単位時間で取り扱うが、内容によっては複数の時間の関連を図った指導の工夫をすることも計画的に位置づけ取り組む必要性が主張されている<sup>(27)</sup>。このように、道徳の授業においては、自分の考えを書く活動や、自らの成長を実感できるような活動の工夫を推奨しているため、図2のような、児童の振り返り記述が1時間ごとに蓄積されていくワークシートを作成した。

このOPPシートについて堀(2013)は「教師のねらいとする授業の成果を、学習者が一枚の用紙の中に授業前・中・後の学習履歴として記録し、その全体を学習者自身に自己評価させる方法」と示している<sup>(28)</sup>。プログラムを実施し、学びをOPPシートに蓄積していくことによって、学習者が、1時間ごとに自分を取り巻く対人関係構造の広がりを意識できるようにした。なお、分析に際しては、分析者による理論や問題意識によるバイアスを明確に排除できるよう樋口(2020)が開発したフリー・ソフトウェア「KH Coder3 (3.Beta.03i)」を用いて計量テキスト分析を行った<sup>(29)</sup>。計量テキスト分析とは、計量的分析手法を用いてテキスト型データを整理または分析し、内容分析を行う方法である。樋口(2020)はインタビューなどのテキスト型データに計量テキスト分析を用いる利点として、信頼性および客観性を向上させること、データの全体像や概観を描くのに適していると報告しているため、振り返り記述をテキスト形式に変換し、出現頻度の高い語を抽出した共起ネットワークを作成し、分析を行った<sup>(30)</sup>。

図2 本研究で活用したOPPシート

### 2. 5. 3 【分析3】抽出児童の自由記述分析

プログラムを通じた意識変容の具体を検証するために、全てのプログラムを終えた後に「これまでの道徳の授業を通して、友達とのかかわり方について考えたことを自由に書きましょう」という教示文のもと、自由記述を求め、抽出児童の記述を分析した。

なお、本研究では、以下のような手順を踏まえて抽出児の選定を行った。まず、友人関係に対する動機づけ尺度の結果をもとに、事前と事後の平均値をそれぞれ算出し、比較した。その結果、分析対象者全体で平均0.36点の上昇が見られた。次に、この点数を基準に、事前と事後で0.36点以上の上昇がみられた学習者13名を高自律的動機づけ群、それ以外の学習者15名を低自律的動機づけと分類した。そして、事前と事後で低群から高群へ変容の見られた高自律的動機づけ群の児童の中から2名（E児、F児）を、無作為に抽出した。

	ステップ1	ステップ2	ステップ3
教材	「ミレーとルソー」	「ブランコ乗りとピエロ」	「祭り日」
内容項目	B-(10)「友情, 信頼」	B-(11)「相互理解, 寛容」	C-(16)「よりよい学校生活・集団生活の充実」
ねらい	自分や友達, 友情関係について自身の考えを深める	謙虚な心を持ち, 自分と異なる意見や立場を尊重することについて考えを深める	よりよい学級集団としてのあり方について考えられるようにする
	・主な発問と予想される児童の反応      ○発問      ◎中心的な発問		◇教師の問い返し
導入	○「友達だから～できる」 ～に何を入れますか ・一緒に遊べる ・一緒に勉強できる ・共に高め合える ○教材を範読する ○教材を読んで気になったことを交流する ・2人は離れ離れになっても友達で居続けたことがすごいと思った。 ・ずっと友達でいられる関係性っていいな	○意見が合わない人と関わるときに大切にしていることはありますか ・なるべく相手に合わせる ・あまり関わらない ○教材を範読する ○教材を読んで気になったことを交流する ・サムとピエロは, 最初は仲が悪かったけど, 最後はお互いに認め合える関係になってすごい ・最初は仲が悪かったけど, 最後はいい関係になった	○「協力」と聞いてどのようなことを浮かべますか ・みんなで力を合わせる ・クラスの友達と団結する ○教材を範読する ○教材を読んで気になったことを交流する ・2回目はみんなが協力したから, 素敵な演奏になった ・1回目の演奏もがんばったけど, 足りないものがあった
展開	◎ミレーとルソーのような関係性を本当の友達だと思いますか ・相手のことを考えているから本当の友達だと思う ・体が動かなくなっても, お見舞いに向かうくらいルソーのことを思っていたと思う ・隠れて絵を買ってあげるくらいだから, それだけ大切に思っているんじゃないかな ◇本当の友達なら, 隠れて絵を買う必要はなかったんじゃないかな ・余計な気を使わせたくなかった ・ルソーはミレーの実力を認めていたからこそ, 絵を買ったと思う ・対等だからこそその優しい嘘だったんだと思う	◎最初と最後の2人の関係性の違いは何か ・最初はいがみあう仲だったけど, 最後は仲良くなった ・仲良くなったというか, お互いの良さに目を向けるようになったんだと思う ◇お互いを認め合えるようになったのはなぜかな ・どちらも力があるから, それを生かすことによって最初よりももっとレベルの高いサーカスを目指そうと思ったから ◇もしも, サムとピエロのような見方ができたらみんなの生活はどのように変わっていくか ・苦手な人とも分かり合える ・もしかしたら, 良さを認め合って友達になれるかもしれない	◎1回目と2回目の演奏の違いは何か ・1回目は, 協力していたけど, 自分が出ようとし過ぎていた ・2回目は, 相手に合わせて自分の力を出したり引っ込めたりしていた ◇協力するってことは, 自分の力を抑えて我慢すればいいってことかな ・自分の出るところと抑えるところを意識すること ・そうすればそれぞれのよさを生かしてもっといい演奏になると思う ・一人でがんばるのではなく, みんなで一つのを創り上げるために, 自分にできることを考える
終末	○「友達だから～できる」 ～に何を入れますか ・離れていても, 互いに思いあえる関係性 ・本当の意味で互いに高め合える ○本時の振り返りをしましょう	○意見が合わない人と関わるときに大切にできそうなことはありますか ・相手の悪い所だけでなく良さをを見つけようとする心が必要 ○本時の振り返りをしましょう	○授業で見つけた真の協力ができたからこの学級はどのようになるかな ・音楽発表会もうまくいくだろう ・良さを生かし合えるようになる ○本時の振り返りをしましょう

図3 主な授業の概要

### 3 結果と考察

#### 3.1 友人関係に対する動機づけ尺度

表2 友人関係に対する動機づけ尺度の結果

5年D組 N=28	時期	Mean	S.D.	F比
同一化的調整	10月4日	3.63	0.99	3.19 <sup>+</sup>
	10月26日	4.01	0.75	
内発的動機づけ	10月4日	4.02	0.86	4.04 <sup>+</sup>
	10月26日	4.37	0.65	

<sup>+</sup>p<.10 \*p<.05 \*\*p<.01

5年D組の友人関係に対する動機づけ尺度の結果を表2に示す。友人関係に対する動機づけ尺度における、下位項目の同一化的調整 (F=3.19, <sup>+</sup>p<10), 内発的動機づけ (F=4.04, <sup>+</sup>p<10) については有意傾向が見られた。これらのことから、研究期間内において、児童の友人関係に対する動機づけに対する認知に変容が確認された。なお、下位項目の同一化調整と内発的動機づけについては、5%以上10%未満で有意傾向が見られるという判定であったが、中野・田中(前掲)は「ビジネスや教育の世界においては、学問のように慎重な判断をしていたら、有望な改善の機会を逃してしまう危険性がある」としながら「実用上の改善・開発・危機管理について判定する「探索発見型」の研究では10%、あるいは15%を目安にすることもできる」と主張していることから、本研究においても有意な上昇が見られたと判断した<sup>(31)</sup>。

#### 3.2 OPPシートへの記述分析

##### 3.2.1 第1時の結果より

表3 1回目の記述の頻度語

	頻出語	出現回数
1	友達	42
2	思う	36
3	大切	19
4	本当	18
5	最初	17
6	ルソー	14
7	意見	13
8	ミレー	12
9	考える	10
10	自分	9
11	行動	8
12	分かる	6
13	気持ち	6
14	助ける	5

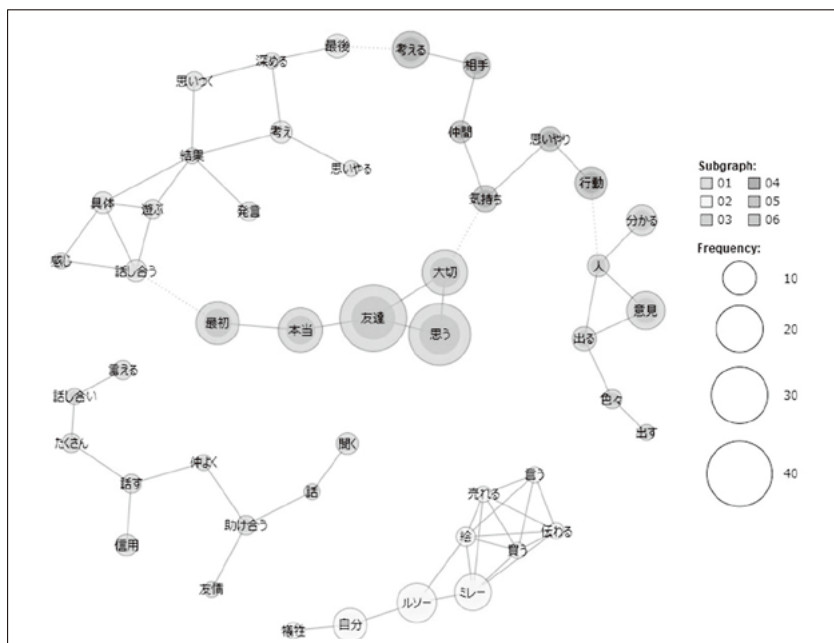


図4 1回目の記述の共起ネットワーク

児童には、プログラムによる3回の授業ごとに「今日の授業を通して思ったことを自由に書きましょう」という指示文のもと、授業終了後に記述を求めた。そして、第1時の終わり(1回目)、第2時の終わり(2回目)、第3時の終わり(3回目)のOPPシートへの記述をKH Coderで分析し、頻度表を作成した。1回目の結果は、全ての語の延べ数である総抽出語数が1616、何種類の語が含まれているかを示す数である異なり語数は249であり、助詞や助動詞を除いて分析対象として使用された語数は167であった。図4の共起ネットワークは、よく一緒に用いられていた語

のペアを線で結んだ図である。なお、強い共起関係ほど濃い線として描かれ、出現数が多い語ほど、円が大きくなっている。

表3からは、「友達」「思う」「大切」「本当」など、友人関係について考えたことを示す単語が多く抽出された。図4の共起ネットワークからも、「友達」「大切」「思う」や「助け合う」「友情」「仲良く」「話す」の語の結びつきが示されていることから、授業を通して、自分や友達、友情関係についての考えが意識づけられている様子が窺える。また、KH Coderでは、「KWICコンコーダンス」というコマンドを用いると抽出語がどのように用いられていたのかという文脈を探ることができる。そこで、頻出単語である「友達」「思う」に対してKWICコンコーダンスを用いて検索すると、例として「助けてあげたり仲間として気持ちを考えてあげることが大切だとわかりました。今後も自分も友達も大事にしたいと思います」「この勉強を通して友達を大切にしたいと思います。友達が困っていたら助けてあげたいです」などの記述が見られた。このように「友達と…(中略)…思う」「友達と…(中略)…たい」という動機づけの高まりが窺える表現を使った記述が、学級内における62.9%確認されたことから、第1時（ミレーとルソー）の学習を通して、友達を大切にしたいという思いや願いが高まっている可能性が示された。

### 3. 2. 2 第2時の結果より

表4 2回目の記述の頻度語

	頻出語	出現回数
1	意見	67
2	相手	52
3	思う	33
4	考える	25
5	理解	22
6	合う	20
7	人	17
8	行動	14
9	自分	14
10	認める	14
11	話し合う	14
12	お互い	11
13	気持ち	11
14	今日	10

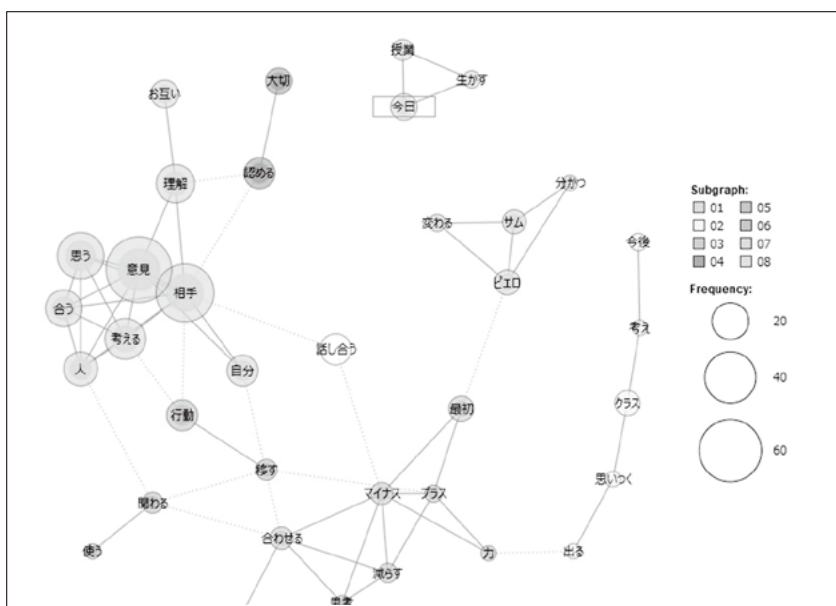


図5 2回目の記述の共起ネットワーク

2回目の結果は、総抽出語数が2208、異なり語数は296であり、助詞や助動詞を除いて分析対象として使用された語数は197であった。

表4からは、「意見」「相手」「思う」など、相手の意見に目を向けようとする単語が多く抽出された。図5の共起ネットワークからも、「意見」「相手」「考える」「思う」「合う」や「お互い」「理解」「認める」の語の結びつきが強く示されていることから、授業を通して、自分と異なる意見や立場を尊重することの大切さについて考えている様子が窺える。頻出単語である「意見」「相手」に対してKWICコンコーダンスを用いて検索すると、例として「クラスでも意見が合わない人がいたりしても、相手の意見についてしっかり考えると意見を分かち合えるいいクラスになるんじゃないかと思います」「これからは意見が合わない人にも自分の意見を言って、相手の言っていることも理解して友達になれるようにがんばりたいです」など、少数集団に目を向けた記述が見られた。このように「意見が合わない人とも…(中略)…思う」「意見が合わない人とも…(中略)…たい」など、他者と折り合いをつけてかかわろうとするものの見取れる記述が学級内における55.6%の児童が行っていたことから、第2時（ブランコ乗りとピエロ）の学習を通して、杉田(2013)によって「一人一人がのびのびと切磋琢磨し、間違いも許されるような集団であり、学級集団としても高い学び合いができる」というように、よりよい学級集団を形成していこうとする動機づけが高まっている可能性が示された<sup>(32)</sup>。

3. 2. 3 第3時の結果より

表5 3回目の記述の頻度語

	頻出語	出現回数
1	協力	55
2	考える	53
3	思う	44
4	自分	28
5	クラス	23
6	相手	23
7	真	20
8	行動	18
9	周り	18
10	意見	14
11	最初	11
12	見る	10
13	分かる	10
14	方法	10

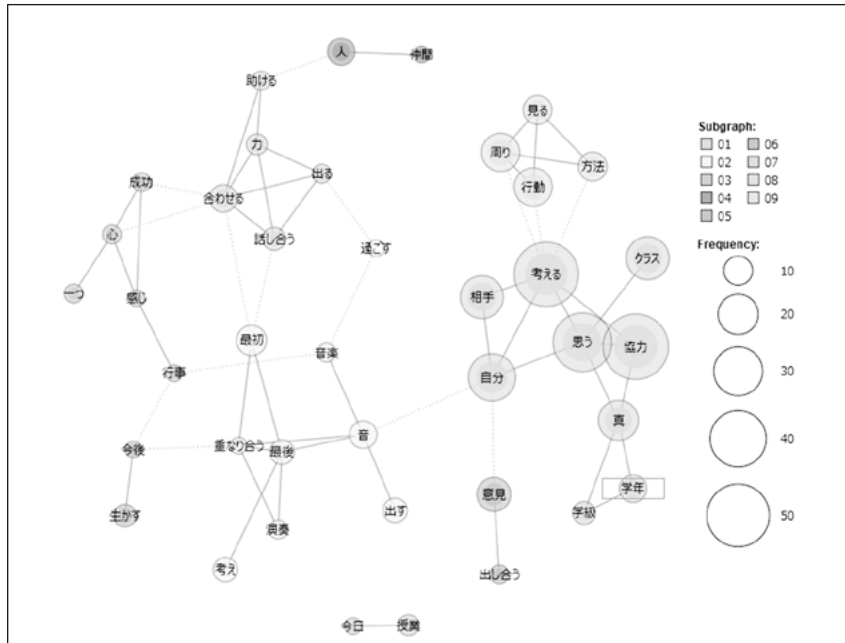


図6 3回目の記述の共起ネットワーク

3回目の結果は、総抽出語数が2435、異なり語数は300であり、助詞や助動詞を除いて分析対象として使用された語数は187であった。

表5からは、「協力」「考える」「思う」など、他者との協力を向けようとする単語が多く抽出された。図6の共起ネットワークからも、「協力」「思う」「考える」「相手」「クラス」や「学級」「学年」の語の結びつきが強く示されたことから、授業を通して、他者と協力関係を構築することの大切さや、学級や学年など多数者集団に目が向いている様子が窺える。頻出単語である「協力」「考える」「思う」に対してKWICコンコーダンスを用いて検索すると、例として「協力とは、「周りを気にしたり相手やみんなのことを考える」ということなのかと思った。これからは意見が合わない人にも自分の意見を言って、相手の言っていることも理解して友達になれるようにがんばりたいです」「みんなでまとまって、もっといいクラスにしたいです。そのために、わからないときはみんなで分かり合えるようにしたい」「自分の役割を意識して協力できるようになりたいと思う」などの記述が見られた。このように「みんな…(中略)…思う」「みんな…(中略)…たい」という表現を使った記述が、学級内における70.4%確認されたことから、杉田(2013)の「みんなで一つの目標に向かって協力し、よりよい生活や人間関係を築くこと」を目指そうという動機づけが高まっていると考えられる<sup>(33)</sup>。これらのことから、第3時(祭り日)の学習を通して、他者と協力し合ってよりよい学級や学校をつくるとともに、集団の中で自分の役割を自覚して集団生活の充実に努めていこうとする動機づけが高まっている可能性が示された。

3. 2. 4 考察

プログラム中に蓄積されたOPPシートの記述の傾向を概観すると、第1時では「友達」「思う」「大切」と、友達のことを考えようという思いの高まりが窺える単語が多く表出し、第2時後では、「意見」「相手」「思う」と友達のみならず、意見が合わない人とも関わろうとする意欲の高まりが窺える単語とともに、自ら「行動」をしていこうとすることの見て取れる単語が示された。また、第3時後には、「協力」「考える」「思う」「クラス」と多数者集団に働きかけていこうとすることが窺える単語が示された。さらには、「周り」「見る」「行動」「方法」という単語が上位に見られたことから、プログラムの実施に伴い、学級集団全体として自分を取り巻く対人関係構造を、個人から少数者集団、少数者集団から、多数者集団へと学びの広がりを意識した道徳性の発達が見て取れる。

山岸(1977)は、道徳性の発達段階論を提唱するKohlbergの理論をもとに6つの発達段階のステージを示しており、本研究で明らかとなった事例と重ねて検討すると、第1時での意識は、ステージ3の「よい対人関係への志向」、第2時での意識は、ステージ4となる「義務を果たし、与えられた社会秩序を維持することへの志向」、第3時後の意識は、ステージ6の「相互の信頼と尊敬への志向」を示していると考えられる<sup>(34)</sup>。また、第1時から第3時ま



での頻度語やKWICコンコーダンスによって抽出された記述を概観すると、友人や多様な他者とのかかわりを広げていこうとする動機づけの高まりと同時に「友達を助けたい」「相手を思いやって」「心を合わせて」など、友人に対して、援助的、協同的にかかわっていこうという意欲の高まりが窺える記述が見られた。岡田(2013)は、親密な友人関係の形成や維持を促すかかわりとして、向社会的行動の大切さを主張しながら、友人関係に対する自律的動機づけと、向社会的行動との関連を明らかにしており<sup>(35)</sup>、山本ら(2021)は、一般的に思いやりなどの向社会的行動は、道徳的行動と見なされることが多いため、向社会的行動と道徳性には密接な関連があると指摘している<sup>(36)</sup>。これらのことから、プログラムを通して、子どもたちの友人に対する向社会的行動への動機づけが高まっていると推察できる。

以上のことから、プログラムの実施に伴って、子どもたちの友人関係に対する自律的な動機づけが高まり、下位項目である同一化的調整や内発的動機づけが有意に上昇した可能性が示唆された。

### 3. 3 抽出児童の自由記述分析

#### 3. 3. 1 抽出児童, E児の自由記述

表6 E児の自由記述(原文ママ)

①最初の考えより、最後の考えの方が、考えが深まって、自分自身これからどうしていくかをかくことができたから、  
 ②「本当の友達」「意見が合わない人との関わり方」「真の協力」について、他の人の意見も聞きながら自分の意見と比べ、考え直すことができた。他人の意見をうなずきながら分かろうとした。自分の考えを分かりやすいように伝えた。  
 ③友達は、約束を守らないといけないけど、守れなかったらきちんと事情を伝えたい。友達だけでなく、クラスのみんなで話し合うクラス会議の時も、相手の意見を理解しつつ自分の考えも相手に理解してもらえるようにくわしく説明力のある意見をしたいし頼りたい。④協力するとき、自分から周りに合わせるのではなく、みんなで策を考えられるような集団になることが大切だとわかった。

表6①②のように「最初の考えより、最後の考えの方が、考えが深まって、自分自身これからどうしていくかをかくことができた」「本当の友達」「意見が合わない人との関わり方」「真の協力」について、他の人の意見も聞きながら自分の意見と比べ、考え直すことができた。他人の意見をうなずきながら分かろうとした。自分の考えを分かりやすいように伝えた。」という記述が確認された。学びのドーナツ論において佐伯(1995)は「人の学びをひろげてくれるのは、YOU的他者(二人称的他者)と、YOU的道具(教材)との親密な交流であり、それによって、私達の「からだ」=自我が拡大し、変化し、さらにより深く社会・文化に「入り込んで」いくのである」と主張している<sup>(37)</sup>。つまり、E児は、段階を踏んだ3つの教材を活用した授業プログラムを通して、他者とのかかわり方について考えていく中で、自身の既存の考えを再構築して振り返り、後段のよりよくあろうとする意識の高まりを引き出すことにつながっていると考えられる。

実際に、表6③④のように、「事情を伝えたい」「自分から」と自己開示をしながら、積極的にかかわっていこうと動機づけを高める姿や「大切だとわかった」という表現を使いながら、他者とかかわることへの大切さに気づくことが見て取れる記述が確認された。このことは、岡田(2013)による「友人に対して積極的に自己開示を行うことは、親密な関係の形成や維持を促すものとなる」という自律的動機づけに関する主張とも合致していると考えられる<sup>(38)</sup>。また、表6④のように「みんなで策を考えられるような集団になる」という表現を用いた記述からは、学級の自治を志向し、より協力的な高次の学級集団を構築していこうという思いの高まりが窺える。これは、杉田(2013)による「みんなで一つの目標に向かって協力し、よりよい生活や人間関係を築く」という主張と合致するものであり、よりよい学級集団の実現に向けた動機づけの高まりを示唆するものであると考えられる<sup>(39)</sup>。これらのことから、プログラムを通して高まった、E児の同一化的調整は、今後のE児の親密な友人関係形成や、高次の学級集団形成や維持への行動を引き出すことにつながるものになると推察できる。

## 3. 3. 2 抽出児童, F児の自由記述

表7 F児の自由記述(原文ママ)

⑤ミレーとルソーでは、本当の友達について学べたし、自分がこれから友達に何をしてあげられるか考える機会になりました。ブランコ乗りとピエロでは、意見が合わない人とかかわり方について知れたし、相手のことを考えて行動して認めることも大切なんだと分かりました。祭り日では、協力について真の協力について学べたし、周りを見て行動しようと思いました。この3つの授業を通して、私は、本当の友達とはなにか、何ができるのかということを見直す機会になりました。

⑥相手の意見を聞いて話し合ったりして認め合うことで友達ともっともっと関わっていきたいと思いました。自分は友達に何かしてもらったから、その恩を何かで返したりしてあげることができるかなと考えるようになりました。⑦意見が合わなくても、その人とかかわりを減らすのではなくて、その人のいい所を見つけられたらいいと思うので、これから友達と話すときは、自分から思いを伝え、自分の意見だけじゃなくて、相手の話も聞いて誰とでも本当の友達に近づけるようにしたいと思いました。これからはこの学習を生かして生活していきます。

表7⑤には、それぞれプログラムで活用した教材での学びを概観したことの見て取れる記述が見られた。これらの記述からは、F児は、プログラムを通して学習を積み重ねていくたびに、自分を取り巻く対人関係構造を、個人から少数者集団、少数者集団から、多数者集団へと学びの広がりを意識していることが見て取れ、佐伯(1995)による学びのドーナツ論の考え方も合致していると考えられる<sup>(40)</sup>。また、佐伯(1995)はドーナツ論において想定した共同体について「未知性を相互に受け入れて、畏敬の念で互いに学び合い、協同的に活動する共同体」と定義しながら「人はそういう共同体の中で、他者の身に(一人称的に)「なって」みたり、他のものに「なって」みたりしながら、自分というものを反省し、吟味し、「なってよかった、自分」を模索するのである」と主張している<sup>(41)</sup>。つまり、F児は、段階を踏んだ3つのプログラムを通して、友人との関わりに対する既存の考えを再吟味し、なりた自分像を描きながら、他者と関わっていきこうという動機づけを表7後段に綴っていったと推察できる。

実際に、表7⑥⑦に目を向けてみると、対人的な好みに関わらず、他者と協働し折り合いをつけながらかかわっていきこうとする意欲の高まりが窺える記述が見られた。岡田(2013)は、友人関係や仲間関係における経験の量と質が、友人関係についての自己概念に影響する可能性を主張している<sup>(42)</sup>。また、岡田(2013)は、友人関係における内発的動機づけを支持しながら「活動それ自体を目的として、興味や楽しさなどのポジティブな感情から動機づけられている状態である」と主張している<sup>(43)</sup>。これらのことから、F児の「もっともっと」という自らかかわっていきこうとする表現を使った記述は、現状の友達とかかわりに対して満足することなく、さらに他者と関わっていきこうとする内発的動機づけが高まっていると見なすことができる。さらに、表7⑦の「誰とでも…(中略)…したい」という他者と折り合いをつけて良好な関係性を築こうという動機づけの高まりの窺える表現は、白松(2017)による、「他者の価値観を尊重し、「好き-嫌い」を超えて、共に協働し、課題解決をすることのできる関係性」という自治を志向した主張と関連するものであり、より質の高い学級集団の形成に向けて動機づけが高まっていると推察できる<sup>(44)</sup>。これらのことから、F児は、自己の思いを開示しながら、多様な他者と良好な人間関係の形成・維持していきこうと動機づけられている可能性が示された。

以上のことから、2名の抽出児童が、プログラムを通して友人関係への動機づけを高め、下位項目の同一化的調整と、内発的動機づけが有意に上昇し、その背景には、児童の向社会的行動や自己開示をしていきこうという動機づけが影響している可能性が示唆された。そして、積極的に他者とかわって協力的な関係性を築いていきこうという思いや願いの高まりは、良好な人間関係形成に寄与するものになっていくと推察できる。

## 4 総合考察

本研究は、学びのドーナツ論に基づく対人関係上の意識拡大を図り、人間関係形成能力に寄与することを目的とした「特別の教科 道徳プログラム」を開発及び実施し、良好な人間関係の形成に向けた子どもたちの友人関係に対する自律的な動機づけにどのような影響をもたらすか明らかにすることを目的とした。その結果、友人関係に対する動機づけ尺度において、プログラム実施前後で、2名の抽出児を含む5年D組全体に有意な正の変容が見られた。

有意な正の変容が見られた要因について、プログラムを通して蓄積された児童のOPPシート記述を、樋口(2020)によるKH Coderを用いてプログラムごとの意識傾向を分析したところ、自分を取り巻く対人関係構造を、個人から少数者集団、少数者集団から、多数者集団へと学びの広がりを意識しながら、友人関係に対する自律的な動機づけが高まっていくと同時に、道徳性の発達が確認された<sup>(45)</sup>。加藤・岡田(2016)は、道徳科における学びの動機づけに対し

て「心が動かなければ身体は動かない」としながら「子どもたちが今まで当たり前だと思っていたもの（既知）から、今まで考えたことがなかったもの（未知）を引き出し、問題意識をもたせることである」と主張していることから、プログラムの実施に伴って、子どもたちの友人関係に対する自律的な動機づけが高まり、その先の具体的な行動化に向けた思考を促したと考えられる<sup>(46)</sup>。

また、プログラム終了後に実施した児童の振り返り記述を分析した結果、「友達を助けたい」「相手を思いやって」「心を合わせて」など、友人に対して、援助的、協同的な姿勢のもと向社会的行動を行っていかうとする記述や、「自分から」「思いを伝えたい」など、自己の思いを開示しながら、友人との良好な人間関係の形成・維持していかうという意欲の高まりが窺える記述が確認された。岡田(2013)は「向社会的行動と自己開示は、いずれも自身の行動に対して相手から同等の行動が返されるという返報性や相互性という特徴をもつ」と指摘している<sup>(47)</sup>。さらに、友人に対して行う自己開示量と友人から受ける自己開示量との間に強い相関がみられることを報告している岡田他(2005)が、自分から友人に関わっていくことが、相互作用の開始点となり得る可能性を示唆していることから、自身が友人を援助し、自らの情報を相手に開示するなど積極的に働きかけることで、相手からも同様の行動が返され、多様な他者との関係性の発展に寄与するものになると考えられる<sup>(48)</sup>。これらの分析結果を複合的に概観すると、本研究において開発した道徳授業プログラムを通して、向社会的行動や自己開示をしようという思いのもと、友人との良好な人間関係の形成・維持していかうとする動機づけを高まり、児童の友人関係に対する自律的動機づけが向上した可能性が示唆された。

## 5 今後の課題

本研究を通して、対象学級の児童における友人関係に対する自律的動機づけ向上が確認されたが、岡田(2013)は、「誰もが親密な友人関係を享受しているわけではない」と主張しており<sup>(49)</sup>、白松(2017)は「私たちが意識的・無意識的に「理想」と考えている学級にも、常になじめない、あるいは考えが合わない児童生徒が存在する」と指摘している<sup>(50)</sup>。すなわち、関係を築くことに苦慮している児童生徒は、どのような学級にも少なからず存在するということが推察できるため、そのような児童生徒に向けたアプローチの在り方を検討していく必要がある。また、本研究は、プログラム全体による意識変容を明らかにしたものであり、1時間ごとの学習効果について言及したものではない。さらに、岡田(2013)が「友人関係に対する自律的動機づけは、学習場面においても積極的な友人とのかかわりを促すものである」と主張しているように、高まった動機づけが、教科場面や生活場面においてどのように汎化しているか具体的な姿を明らかにしていくことも重要である<sup>(51)</sup>。

## 引用文献

- (1) 文部科学省：「令和3年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果概要」, 2022, [https://www.mext.go.jp/content/20221021-mxt\\_jidou02-100002753\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20221021-mxt_jidou02-100002753_2.pdf) (2022年11月2日閲覧)
- (2) 文部科学省：「令和2年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果概要」, 2021, [https://www.mext.go.jp/content/20201015-mext\\_jidou02-100002753\\_01.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20201015-mext_jidou02-100002753_01.pdf) (2022年5月22日閲覧)
- (3) 文部科学省：「生徒指導提要」, 2022, [https://www.mext.go.jp/content/20230220-mxt\\_jidou01-000024699-201-1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20230220-mxt_jidou01-000024699-201-1.pdf), (2023年1月7日閲覧)
- (4) 文部科学省：「小学校学習指導要領解説 特別活動編」, 2008 [https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2009/06/16/1234931\\_014.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2009/06/16/1234931_014.pdf), (2022年6月11日閲覧)
- (5) 文部科学省：「小学校学習指導要領解説 特別活動編」, 2017 [https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2019/03/13/1387017\\_014.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2019/03/13/1387017_014.pdf), (2022年6月11日閲覧)
- (6) 文部科学省：「小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」, 2017 <https://www.pref.hiroshima.lg.jp/uploaded/attachment/253050.pdf>, (2022年6月11日閲覧)
- (7) 伊佐貢一：「好ましい人間関係を結ぶ力の育成—思いやり育成プログラム(VLF: Voices of Love and Freedom)を適用した道徳授業を通して—」, 教育実践研究, 15集, pp.145-150, 2005
- (8) 丸山智子：「学級生活満足度を高める学級経営の取組—いじめ防止プログラムの実践を通して—」, 教育実践研究, 18集, p.186, 2008

- (9) 佐藤貴幸：「望ましい人間関係を構築する力を育成—ロールプレイングを取り入れた道徳の授業での指導と、各教科や特別活動及び総合的な学習の時間などでの体験活動と関連させたプログラムを作成した実践から—」, 教育実践研究, 19集, pp.153-158, 2009
- (10) 岡田涼：「友だちとのかかわりを促すモチベーション—自律的動機づけからみた友人関係—」, p.155, 北大路書房, 2013
- (11) 前掲(10)
- (12) 前掲(10)
- (13) 佐伯胖：「「学ぶ」ということの意味」, pp.65-78, 岩波書店, 1995
- (14) A・ワロン著：「身体・自我・社会」, 浜田寿美男訳編, pp.138-148, ミネルヴァ書房, 1983
- (15) 吉田直人：「子どもが作りだした学びの場—「子どもの文化的実践」の考察を通して—」, 琉球大学教育学部教育実践研究指導センター紀要, 第6巻, pp.139-149, 1998
- (16) 吉岡三貴：「小学校の音楽の授業におけるタップダンスの実践について」, 江戸川大学こどもコミュニケーション研究紀要, 3, pp.21-32, 2018
- (17) 前掲(7)
- (18) 前掲(9)
- (19) 前掲(13)
- (20) 加藤宣行・他22名：「小学道徳 ゆたかな心 5年」, pp.138-141, 光文書院, 2017
- (21) 加藤宣行・他22名：「小学道徳 ゆたかな心 6年」, pp.68-71, 光文書院, 2017
- (22) 加藤宣行・他22名：「小学道徳 ゆたかな心 4年」, pp.114-117, 光文書院, 2017
- (23) 加藤宣行：「「資質・能力」を育成する道徳科授業モデル」, pp.96-103, 学事出版, 2017
- (24) 東京学芸大学：「道徳教育に関する小・中学校の教員を対象とした調査—道徳の時間への取組を中心として—〈結果報告書〉」, 東京学芸大学「総合的道徳教育プログラム」推進本部第1プロジェクト, pp.86-89, 2014
- (25) 前掲(10)
- (26) 中野博幸・田中敏：「フリーソフト js-STARでかんたん統計データ分析」, pp.160-166, 技術評論社, 2012
- (27) 前掲(6)
- (28) 堀哲夫：「教育評価の本質を問う 一枚ポートフォリオ評価—一枚の用紙の可能性—」, pp.20-21, 東洋館出版社, 2013
- (29) 樋口耕一：「社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—」, pp.12-15, ナカニシヤ出版, 2020
- (30) 前掲(29)
- (31) 前掲(26)
- (32) 杉田洋：「自分を鍛え、集団を創る！特別活動の教育技術」, p.23, 小学館, 2013
- (33) 前掲(32)
- (34) 山岸明子：「道徳判断に関するKohlbergの理論とその発展」, 心理学評論, Vol.20, No.4, pp.348-368, 1997
- (35) 前掲(10)
- (36) 山本琢俣・河村茂雄・上淵寿：「学級の社会的目標構造とクラスメイトへの自律的な向社会的行動との関連—小中学生の差異に着目して—」, 教育心理学研究, 69, pp.52-63, 2021
- (37) 前掲(13)
- (38) 前掲(10)
- (39) 前掲(32)
- (40) 前掲(13)
- (41) 前掲(13)
- (42) 前掲(10)
- (43) 前掲(10)
- (44) 白松賢：「学級経営の教科書」, pp.92-95, 東洋館出版社, 2017
- (45) 前掲(29)
- (46) 加藤宣行・岡田千穂：「子どもが、授業が、必ず変わる！「一期一会の道徳授業」」, pp.24-27, 東洋館出版社, 2016
- (47) 前掲(10)
- (48) 岡田涼・中森仁美・中谷素之：「高校生の自己開示・被開示が学校適応感に及ぼす影響—公的自己意識との関連から—」, 『学校カウンセリング研究』, 第7巻, pp.23-30, 2005
- (49) 前掲(10)
- (50) 前掲(44)
- (51) 前掲(10)

# A Case Study of Autonomous Motivation for Friendship in the Classroom

## In a Moral Classroom Program Using the Donut Theory of Learning

Takuya TSURU\* · Shinji AKASAKA\*\*

### ABSTRACT

This developed and implemented a Special Subjects Morality Program intended to expand interpersonal awareness based on the doughnut theory of learning and contributing to the ability to form relationships and to clarifying how this can affect children's autonomous motivation toward friendships to form good relationships. The results showed significant increases in identification adjustment and intrinsic motivation from the Friendship Motivation Scale. Post-program reflections revealed that the children were more motivated to engage in prosocial behavior and self-disclosure, and expressed more positivity regarding forming and maintaining good relationships with their friends, indicating that the moral education program that was developed in this study may have helped improve the children's autonomous motivation toward friendship.

---

\* Futagawa Elementary school \*\* School Education